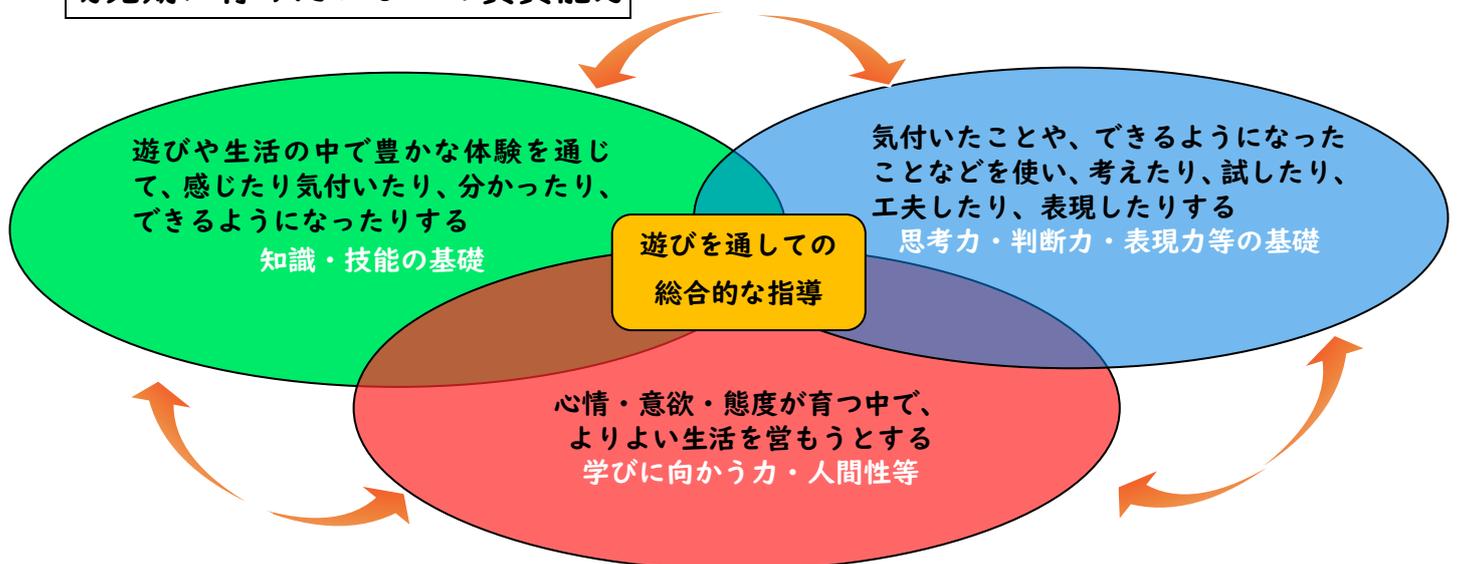


# 加古川市幼小接続カリキュラム

## 幼児期における遊びの中の学びを小学校以降の学習へつなぐ

幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期であります。その時期に、加古川市では質の高い教育・保育を全ての就学前施設において確保することを目指しています。幼児期の学びを小学校以降の学びへと円滑につなげていくために、幼児期に育みたい3つの資質能力を大切に考え、就学前5歳児10月から3月までのカリキュラムを作成しました。小学校での学習の前倒してではなく、園から小学校への学びの連続性を踏まえ、子どもが自らひと、もの、ことに関わり、心を動かして生活を進めていくような環境構成や保育者の援助が大切です。

### 幼児期に育みたい3つの資質能力



幼児期には、生活全体を通して上記に示された3つの資質能力を育てています。子どもが主体的に遊ぶ中で、心も体も様々な能力が相互に関連し合っって伸びていきます。どのようなねらいをもって保育をするのか、そしてその中でどのような力が子ども達の中で育まれているのかをここにまとめています。このカリキュラムや事例をもとに、幼児期の学びを可視化し、ユニットや近隣の小学校と就学前施設で子どもの育ちを共有していきたいと考えています。



## 5歳児10～12月 共同的な遊びや体験が充実する時期

ねらい

- 様々なことに関心をもち美しさや不思議さを感じながら、生活や遊びに取り入れたり表現を楽しんだりする。
- 友達と試行錯誤したり、思いを伝え合ったりしながら、自分達で目的に向かって遊びを進めていく楽しさを感じる。
- 仲間意識をもち、自己発揮して遊ぶ中で、充実感や満足感を味わう。

月

10月

11月

12月

### 影も竹馬 のってるよ

雲、風の変化、月の形の変化などの自然事象に気付く。



### 葉っぱのおふとん 気持ちいい



秋の深まりや自然の豊かさ、美しさなどに心を動かして遊ぶ。

### 12月事例 柚子湯はじまります!



冬の訪れに関心を寄せ、木々の様子や生き物の冬ごもりなど自然物や自然現象の変化に気付く。

内容

### 10月事例 里芋の葉っぱってすごい! ピタゴラスイッチみたい!



秋の草花や木の実など自然への興味が高まり、遊びに取り入れ工夫する。

### 虫ランドつくろう!



イメージを膨らませ、様々な素材を使い、工夫しながらつくる楽しさを味わう。

### プレゼント持って来たよ



冬至、衣恋田に見られる暮らしの変化、年末年始の社会事象などに関心をもつ。

### ぜったい取るぞ!



友達と勝負のある遊びを楽しむ中で、作戦や工夫を積み面白さを味わうと共に、ルールや考えを共有する。

### 11月事例 ドングリコースター うまく転がらへんなあ



遊びがより面白くなるように、友達と共通の目標に向かって試したり、工夫したりする。

### みんなの音がそろったよ



友達と同じ目標に向かって遊ぶ充実感を味わう。

# 5歳児1~3月 互いの成長を感じながら、主体的に園生活を進める時期

ねらい

- できるようになったことや自分の成長が分かり、就学に向けて、友達と一緒に見通しをもって活動する。
- 共通のイメージを広げ、考えを出し合ったり、力を合わせて問題解決したりしながら友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わう。
- 就学への憧れや期待感をもち、友達と共通の目的に向かって意欲的に生活しようとする。

月

1月

2月

3月

内容

## 1月 事例 コロコロってするとできるねん



冬の自然現象に触れて遊ぶ中で、試したり比較したりする。

## こま 何回まわったかな



お正月遊びや伝承遊びをする中で、文字や数量に興味をもつ。

## 秘密基地づくりに挑戦!



仲間意識をもち、やりたい遊びや挑戦したいことに取り組む。

## たくさん跳べたよ



寒さに負けず、体の温まる遊びを工夫し、友達と誘い合って遊ぶ。

## お話をつくろう!



様々な絵本やお話に触れ、自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりしてイメージを広げて遊ぶ。

## 2月 事例 みんなの心をひとつにするのめっちゃ大事!



自分の力を十分に発揮し、互いのよさに気付きながら役割分担をして遊びを進める。

## つくしमीつけた!



花の開花や木々の芽吹き、虫の様子などで春が来たことを感じ、気づきを友達と伝え合う。

## 3月 事例 ちゅうりっぷさん、カメを任せたよ!



就学への憧れや期待感をもち、卒園までを考えたり見通しをもって遊びを計画したりする。

## 今までありがとう



成長した喜びやお世話になった方々への感謝の気持ちをもち、いろいろな形で気持ちを伝える。

## <10月> 「里芋の葉っぱってすごい! ピタゴラスイッチみたい!」

○ねらい 友達と試行錯誤したり、思いを伝え合ったりしながら、自分たちで目的に向かって遊びを進めていく楽しさを味わう。

○内 容 秋の草花や木の実など自然への興味が高まり、遊びに取り入れ工夫する。

雨の日、シホは葉がついたままの里芋を持って登園し、ハルトに「この葉っぱすごいね!めっちゃ不思議やねん!」と自慢気に言う。シホはテラスの雨樋の繋ぎ目から流れ落ちている雨水に葉っぱを当て、「見て!すごいやろ?」ハルト「すごいー!水がボールになった!」と大きな声で言う。マコとニコが「わあ!宝石みたい!」「きれい!」とロタに言い、雨水が玉になって葉っぱの上をコロコロ転がる様子を皆でじっと見ている。シホが保育者に「この葉っぱはツルツルで硬いからや!」と言う。保育者は「いいことを発見したね!」と答える。その後も、4人は葉っぱを雨水に当てて遊ぶ。シホとハルトが葉っぱを上下にずらすと雨水の玉が2枚の葉っぱをつたって下に落ちた。シホ「雨のボールが階段降りよるみたい」ハルト「マコちゃんの葉っぱも僕の下に置いてみて」ニコ「じゃあ私も下に重ねる!」と4枚の葉っぱを階段のようにして持ち、葉っぱの角度を変えながら“雨ボールの階段降り”に挑戦している。シホ「ピタゴラスイッチみたいやな」ニコ「ほんまや!おもしろい!」と笑顔で話し、その後も遊びが続いた。



### < 考察 >

この日、シホは近所の人から葉がついたままの里芋をもらい、葉の上に落ちた雨水が玉になって滑り落ちたことに大きな驚きと発見を感じたのだろう。急いで登園し、驚きながら必死に話すシホの姿からは、心が大きく動いたことが伝わってきた。葉の遊びを通して里芋の葉の不思議さや面白さを感じるとともに、友達とその感動を共有する嬉しさや満足感にもつながっていることを感じた。

### < 幼児の学び >

- ・里芋の葉と水の性質を知り、雨水が玉になる驚きや面白さを友達と共有したいという思い
- ・雨水の玉の動きに合わせて葉の持ち方や角度を考える空間認知

## <11月> 「ドングリコースターうまく転がらへんなあ」

○ねらい 友達と関わりながら、共通の目的に向かって協力して遊ぶ中で、充実感や満足感を味わう。

○内 容 遊びがより面白くなるように、友達と共通の目標に向かって試したり、工夫したりする。

「ここから(ドングリが)落ちてしまう」とトイレトペーパーの芯をつないだコースをじっと見つめるユウ。ケンタは「やり直したらいいやん」とユウのコースを外そうとする。「やめて!せっかくできたのに!」とユウが大声を上げ、にらみつける。ケンタ「でもここ、あかんやん」と指をさす。二人がにらみ合った中、保育者が「全部壊さなくても、直せたらいいなあ」と言うと、ユウ「壁を付けたらいいやん!」と目を見開いて答える。ユウは切った芯が曲面で思うように貼れず何度も試していると、ヒロシが「もってあげるわ」と支え、貼ることができた。2人は顔を見合わせて微笑む。ケンタも加わり、3人でドングリが落ちそうな場所を探し、全部に壁を貼った。2人が見守る中、ユウがドングリを転がすとゴールのカップに入る。ヒロシ「成功や!」ユウ「うん!」と笑顔を見せる。ケンタ「壁がドングリを守ってる!ガードレールや!」ユウ「ガードレール作戦で修理したらいいな。他にもガードレールがいる所があるかなあ」とドングリを手に持ち、修理する場所を探し始めた。



### < 考察 >

ユウはドングリコースターをつくり、妹のクラスを招待したいという思いがあった。自分なりの目的やイメージをもち、遊びを進めていたユウが、困った時に友達の助けを受け入れられた要因は、「ドングリコースターを完成させたい!」という強い思いがあったからだろう。友達と協力することで思いを実現できた経験が、共通の目的に向かって遊ぶ楽しさや充実感につながった。

### < 幼児の学び >

- ・友達の思いを受け入れて協力し、最後までやり遂げようとする諦めない気持ち
- ・自分がイメージしたものができた喜び、達成感

## <12月> 「柚子湯はじまりまーす!」

○ねらい 身近な冬の自然に触れたり、年末年始の暮らしを体験したりしながら気付いたり、これまでの経験とつなげて関心を深めたりする。

○内容 冬の訪れに関心を寄せ、木々の様子や生き物の冬ごもりなど自然物や自然現象の変化に気付く。

### 環境構成 保育者の援助

① 幼児が園内の自然に関わり、興味につながるように、特徴や変化を把握し保育に取り入れる。

② 柚子との関わりが深まるように図鑑を用意する。

③ 季節により自然や生活・文化に変化があることに気付くことができるように冬至の意味や習慣を分かりやすく知らせる。

④ 柚子と生活経験を関連付けて遊ぶきっかけとなるように、幼児と一緒にのれんを用意する。

ナツキが、園庭の柚子の木になった小さな実を見付け「柚子にミカンみたいな実がなってる。①柚子はやっぱりミカン系だったんだね」と言う。虫探しが好きなナツキは1学期にこの木が柚子であることやアゲハ蝶が柑橘類に卵を産み幼虫が育つことを知っていた。「柚子の味は知ってるけどなあ」と言いながら、実を見るのは初めてであることを話し、じっと見つめて実に触れた。保育者が①「この柚子の木は今年に初めて実ったんだよ」と伝えると目を丸くして驚いた。ナツキは②図鑑で柚子が10年位掛かって実ることもあると知り②「奇跡の実や」と大声で言う。保育者も一緒に図鑑を見て「本当だね。今年は特別な年だね」と言うのと走って園庭に戻り実を見た。その後、友達に知らせ実を採るとナツキはもぎたてのヘタの部分に鼻をくっつけて香りを確かめたり、友達と「皮がツルツルだ」「ゴロゴロしてる」など言い合ったりした。

この日はクラスで大掃除を計画していた。保育者から③本日が冬至であること、また冬至の柚子湯についての話を聞いたナツキは興味をもち、「園でお風呂に入れたらいいのにな」「でも水のお風呂は風邪ひくぞ」などと話す。保育者が「お湯を沸かすことはできるよ」と提案すると「それならお風呂できそう」と喜ぶ。大掃除で雑巾を洗う際、ナツキは「ひゃあ冷たい!でも柚子湯があるから大丈夫」と言った。その後、保育者とナツキが④画用紙でつくったのれんを保育室の入り口に掛けると、ミナが③銭湯での経験を話し、ハンカチを頭に乘せて「きつといい湯やで」と銭湯に来た客になりきる。ナツキもそれを見て客になり「僕も入れてもらおう」と客のような口ぶりで話した。柚子湯を入れたタライに手を浸けると「良い匂い」「すべすべになったよ」と言って香りを思いきり吸い込み、ミナを見て笑い合った。保育者から冬至の由来を聞いたナツキは④「これで1年生になる来年は風邪をひかないよ」と言って健康を祈った。



### 内面の読み取り

① アゲハ蝶の幼虫を柚子の木で見つけた経験が親しみになり、新たな興味につながった。

② 柚子の実りまで数年を要することを知ったことが、不思議さや特別感につながり、調べたり、遊びに活用したりしようとする原動力になった。

③ のれんをきっかけに銭湯ごっこが始まることから、生活経験を取り入れる力や相手のイメージや思いを解釈し、受け入れる力、ユーモア性の育ちが見られる。

④ 柚子湯で香り、温かさ、湯の感触、友達の賑やかさなど年末年始の雰囲気を感じ、就学を迎える新年への期待感につながった。

### < 考察 >

ナツキは柚子の実を見て「やっぱりミカン系だ」と確信した。1学期に蝶を探すための必要感が動機となってアゲハ蝶が柑橘系の木に来ることを図鑑や虫探して知ったナツキ。そこで得た知識は、2学期の終わりに実を付けた柚子の木を見つけたことで確信となったと思う。親しみのある柚子の実を使って柚子湯をしたことは就学の年を迎える嬉しさ、期待感につながった。ナツキの姿から幼児は一つ一つの心を動かした実体験をしっかりと覚えており、それを新たな体験とつなげながら知識を蓄えるということを感じた。

### < 幼児の学び >

- ・ナツキの柚子の木への愛着の高まりや自然の不思議さへの気付き、体験からの知識の深まり
- ・風習や文化への興味と新年、就学への期待感の高まり

### < 小学校の先生の気付き >



1つの植物に興味を持って調べ、季節の変化や行事・風習・文化の意味を感じられているね。小学校でも伝統文化を知識で学ぶけど、幼児期の体験を通した学びが結びつくんだね。

のれんという環境1つで銭湯に行った経験が遊びにも出てくるんだね。2年生の生活科では、おもちゃランドという学習活動もあるから、こういう経験は生きてくるね。



## <1月> 「コロコロってするとできるねん」

○ねらい 身近な自然現象を通して不思議に感じたり試したりして、冬の自然に親しむ。

○内容 冬の自然現象に触れて遊ぶ中で、試したり比較したりする。

「雪だるまってな、コロコロってするとできるねん」「3人でしよう!」とアサコ達は、つくった雪玉を園庭で転がす。芝生がつくことを嫌がる友達に、「ついてても大丈夫」と言うアサコ。2人が「えー!嫌だ」「誰も踏んでいない所を通る?」と言うと、アサコは「あっちに行こうか」と指差し、3人は足跡のない方へと再び転がし始める。アサコ達は、坂を転がして雪玉をつくっていたハルヒコを真似て雪玉を大きくすると、「くっつけよう」とハルヒコの雪玉と合わせて雪だるまをつくる。キンカンや枝、砂場のカップなどを集めて、目や口に見立て雪玉に押し込むがすぐに落ちてしまう。アサコは、付けたい枝の真下に新しく雪を付けるが、すでに氷のように固まっており、くっつかない。アサコは「この雪は言うことを聞いてくれない雪だ」とつぶやく。保育者が「こっちにこんな雪もあるよ」とサラサラの雪を見せると、誰も踏んでいないところから新しい雪を取り、枝の隙間に埋め込みだす。手を離しても枝が落ちないことを確かめて、アサコらは「付いた」と笑う。4人はその後も細かい部分にはサラサラの雪を埋め込みながら雪だるまに飾りをつけ続けた。



### < 考察 >

アサコは雪だるまづくりの途中、友達と思いが異なってしまふ。普段であれば自分の思いを通そうとするアサコが、芝のついていない雪だるまづくりを受け入れたことに驚いた。それは、園庭に積もった雪に心を動かし、同じように心弾ませながら集まった友達と雪だるまをつくるという共通の目的ができたからだろう。雪への興味から友達関係を広げ、じっくり雪に関わり試しながら遊ぶことができた。

### < 幼児の学び >

- ・雪の性質への気付きと遊びへの応用
- ・友達と考えを伝え合い、よい方法を取り入れながら、力を合わせて雪だるまをつくり上げる達成感や満足感

## <2月> 「みんなの心をひとつにするの、めっちゃ大事!」

○ねらい お話の世界に思いを寄せ、友達とイメージを膨らませながら一緒に表現する楽しさを味わう。

○内容 自分の力を十分に発揮し、互いのよさに気付きながら役割分担をして遊びを進める。

アヤはお話「みつばちマーヤのぼうけん」のスズメバチ(の攻撃)から仲間を守るミツバチの場面で遊んでいる。前日成功したスズメバチを複数人で囲んで捕まえる作戦を試すが、隙間から逃げられる。アヤは「もう少し腕をピンと伸ばした方がいいと思う」と腕を真横に伸ばし、輪の作り方をサキ達と確認する。再度、試すが輪が作れず、次第に立ち上がるタイミングもずれてくる。「なんでやろう?」とサキが呟き、沈黙の後、アヤが「みんなの心がひとつになってないから」と力強い声で言う。「心がひとつになってないと捕まえられるの?」と保育者が驚くと、「みんなの心をひとつにするの、めっちゃ大事。今、伸ばす腕とか立つ瞬間とかバラバラだから、心がひとつになってない」と表現して見せる。サキ「心をひとつにしないと赤ちゃんも女王様も仲間もみんな守れないよ」レン「ミツバチって一匹一匹では弱いけど、みんなで力を合わせるとスズメバチより強くなるんだよ」ヒナ「心をひとつにするの大事だね」リサ「ヤー!とか掛け声があったらよくない?」アヤ「いいね」サキ「やってみよう」と笑顔で互いの顔を見合う。



### < 考察 >

「みんなの心をひとつに合わせるといふ気持ちが大事だ」といふアヤの思いは、お話の登場人物に思いを寄せて繰り返し作戦を試す中で気付いたことであると同時に、アヤが1年間友達と心を合わせて様々な遊びや行事をやり遂げて実感してきたことでもあった。だからこそ、みんなの気持ちがバラバラになっていることに気付き、「みんなの心がひとつになってない。みんなの心をひとつにするの、めっちゃ大事」と力強く友達に伝えたのだと思う。

### < 幼児の学び >

- ・ミツバチの仲間を守るためには、また、友達と何かをやり遂げるためには、みんなの心をひとつに合わせるという気持ちが大切だといふ気付き
- ・イメージしたことを思い通り実現できないもどかしさや葛藤を友達と共に乗り越え、友達と心をひとつに合わせて取り組む楽しさ

## <3月> 「年少さん、カメを任せよう!」

○ねらい 季節の変化を感じる中で、生命の不思議さや尊さに気付いたり、責任をもって世話を年少児に引き継ごうとしたりする。

○内容 就学への憧れや期待感をもち、卒園までを考えたり見通しをもって遊びを計画したりする。

### 環境構成 保育者の援助

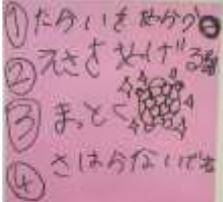
①冬眠中のカメの様子をいつでも見れるように、タライを保育室に置いておく。

②カメへの親しみや愛情をより感じることができるよう、カメが冬眠から目覚めた時の感動や嬉しさに共感する。

③年長児として世話を年少児に引き継ごうとする気持ちを受け止め、年少児と関わる様子を近くで見守る。

④世話の仕方が伝わる方法を考えたり、試したりできるように、材料や文字環境を整えておく。

①タライをじっと覗いていたハルが「動いた!」と大きな声で叫ぶと、年少児のヒロ、年長児のノノカが走ってきた。①ハル「モゾモゾって葉っぱが動いた!生きてる!」と大きな声で言う。ヒロ「どこ?」ハル「ここ!」と葉っぱが動いているところを指さして知らせ、ノノカが「ほんまや!起きた?」と言う。ヒロ「誰が起きたん?」ハル「カメが寝とってん」と興奮しながら教える。3人がしばらく見ていると、葉っぱの中から2匹のカメが首を伸ばした。ノノカ「おはよう!」と言って触ろうとしたが、葉っぱがとても臭くて3人は鼻をつまむ。ヒロ「なんで臭い?」ハル「ずっと寝とったから」ノノカ「葉っぱ替えてなかったから」と言う。②ハル「早く出したらなあかん」ヒロ「じゃあ、このタライに葉っぱ入れてくる」と言って別のタライを持ってくる。ノノカ「葉っぱはもういらないよ」ヒロ「なんで?」ハル「あったかくなったからもう葉っぱいらんねん」と答える。②ハル「そうや!年少さんにお世話の仕方教えてあげよう。僕達もうすぐ1年生になるから。僕たちも教えてもらったもんね」ノノカ「いい考え!」保育者「もうすぐ年長さんは幼稚園来なくなるもんね」と言う。③手洗い場に行ったハルが「年少さん、こっちおいで」と手招きをして自分の隣の場所を空ける。皆でタライを持ち上げ、蛇口に近付ける。ヒロ「どのぐらい水入れるん?」③ハル「カメの背中がすこーし隠れるぐらい」と伝える。ハル「ヒロくん、水出して。僕がストップって言ったら止めてな」と伝える。ハルとヒロは水の量を真剣に見ている。水を入れ終わるとハルが「次はエサをあげるねん」と言う。ノノカ「たくさんあげちゃだめだよ」ハル「6個ぐらいかな」と言いながらヒロの手の上に固形餌を6個置く。ハル「お世話の仕方わかった?」ヒロ「ちょっとだけ」と小さな声で言う。④ハル「じゃあ、紙に書いて年少さんに渡すわ!」と言い、世話の仕方を画用紙に書き始めた。



### 内面の読み取り

①花の蕾が膨らみ始めたり、小虫が出てきたりしていることに気づき、季節の変化を感じていた。そのことから、カメが冬眠から目覚めることに期待を膨らませていた。

②カメの世話を通して、愛着が深まり、より大切にしたいという思いがあったからこそ、年少児に引き継ごうとする気持ちにつながった。

③知識や経験を年少児に分かりやすい言葉や合図で伝えようとし、年少児が自分でできるように見守ったり、手を添えたりした。そのような関わり背景には、年少児との関係が深まっていたことや思いやりの気持ちが育っていたことがある。

### < 考察 >

ハルはこれまで大切にカメの世話をしていたため、3月にカメの目覚めは「生きていた!」と命が続いていたことの大きな喜びになった。卒園が近くなり、園内のことを年少児に引き継ぐ中で、大切にしていたカメのことをいつ伝えるのか保育者は気になっていたが、ハルの心が動くまで保育者は見守っていた。カメの目覚めが春の訪れと卒園をより実感するきっかけとなり、世話の仕方を自分で伝えようとする姿につながったのだろう。一生懸命に引き継ぐ姿からは、その必要性を感じ、年長児としての自覚や責任感が強くなっていく様子が伝わってきた。

### < 幼児の学び >

- ・世話をする中で培ってきた知識や経験を年少児に伝え、年長児として自分が引継いできたものを引き継ごうとする責任感
- ・カメの命が続いている不思議さや尊さを感じ、より命を大切にしようとする優しさや思いやり

### < 小学校の先生の気付き >



小学校の生活科では、生き物の育て方や、命の大切さを知る学習があるので、幼児期の学びが生かされるね。

子ども同士で気付き、教え合って学びを深めていくって大事だね。小学校でも主体的・対話的な学びを研究しているので、幼児期の学びが繋がっていると感じました。



## 接続カリキュラム作成を通して

接続カリキュラムを作成するにあたって、公立園の5歳児担当が、毎月エピソード記録を書き、協議を行いながら進めてきました。また、法人園とも協議を行い、市内就学前施設で一体となって今後取り組んでいくための体制が整いつつあります。



エピソード記録を書くことで、一人の幼児に焦点をあててじっくりと追うことができ、幼児がしたい遊びをする中で、学びや思いが多くあることに気がきました。また、幼児の学びがどこにあるのか捉えようとする意識が高まり、しっかりとねらいをもって保育をすることの大切さについても再確認することができました。

(幼稚園・5歳児担任)

自分自身の保育を丁寧に振り返り、幼児が主体的に遊び込むための援助や環境構成がこれでよかったのだろうか、遊びがより充実するためには、次にどのような環境構成をしていけばよいのかを考えることができました。また、エピソード記録をもとに保育を振り返って協議する機会をもつ中で、色々な先生方の考えに触れたことが大きな学びになりました。

(こども園・主任保育教諭)



接続カリキュラムを作成してみて、私たち保育者が、加古川市の目指す子ども像をしっかりと理解しながら、幼稚園・こども園・保育園で共通した指標をもって子ども達を育てていくことが大切であることを再認識しました。今回カリキュラムを作成しましたが、作って満足するのではなく、今後も形を変えながら伝えたいことが見やすく、使ってもらえる形にしていきたいと思いました。

(保育園・保育士)

幼小接続を進めるためには、小学校の先生が幼稚園・こども園・保育園の保育を積極的に参観することが重要ですね。さらに、幼稚園・こども園・保育園の先生からは、参観の視点や幼児の姿からの学びを記した保育記録を示すことで、小学校の先生にとっても分かりやすいものになると思いました。互いのよさを生かし、理解し合うことで、連続性のある学びの接続が強くなるはずです。

(小学校教諭)



鳴門教育大学大学院学校教育研究科 高度学校教育実践専攻教員養成幼児教育コース 木下光二教授

本カリキュラムは、加古川市の幼児教育に携わる先生方が、カリキュラムマネジメントの視点で作成した幼小接続カリキュラムです。いわゆる、自らの保育を計画・実践・評価・改善し、遊びの中の学びを可視化することで幼児期の学びを小学校につなげたいという熱い思いで作成した加古川市オリジナルのカリキュラムです。幼児期の質の高い保育と、児童期の充実した学習がつながってこそ、カリキュラムも生きたものになります。全市をあげて、滑らかな連続性を図り、加古川市の教育がより充実したものになることを願っています。

